北の大地、千歳市に住んで

伊藤　久美子
千歳市総務部税務課
（指宿市交流派遣職員）

はじめに

私が初めて北海道に足を踏み入れたのは、今回の交流のご挨拶にきた今年の三月だった。さほど多くないという積もった雪は、夢に描いた北海道の景色で、まるで桜島の灰が降ってきたことを大喜びしている観光客のようだった。火山灰とは違い、日々の生活は雪に対応した生活となる。雪への喜びに包まれてか、寒さはあまり感じなかった。想像していた以上に室内は暖かく、外気とは無関係な空間が維持されている。

まだ、二か月も経っていないのに、大変過ごしやすい土地だと感じている。もちろん、冬を過ごしていない私がコメントしてはいけないかもしれない。

今回で千歳市と指宿市の職員交流は、五回目になる。それまで友好関係を維持してきた両市が平成六年に姉妹都市提携を結び、職員交流は平成七年から開始された。三年に一度、それぞれの市役所職員一名が交換というかたちで、一年間の職務に就く。今までの交流職員は、休日は休む暇なく北海道を体感していたと聞く。仕事だけではなく、人間としても大きく成長できるチャンスだと感じている。

職員交流以外にも、青少年相互交流や両市の観光イベントへの参加など様々な形で交流を保っている。また、千歳鹿児島県人会など鹿児島出身の方々の会が作られており、南北に離れた土地ではあるが、今までの結びつきの深さを改めて感じている。

そう言いながらも、九州の最南端のまち「指宿」からきた私にとって、千歳は驚きの都市だ。北海道最大の空港と三つの自衛隊の基地があり、近くには工業団地が広がっている。と思えば、最近話題のアウトレットモールには老若男女問わず人が集まる。空港があるという利便性から、会社や工場が集まり、関わっている人々も家を構える。札幌が大都市であることはもちろんだが、様々なものが集結したこの都市は、人々を寄せ付ける何かがある。

一・姉妹都市　指宿

対照的に、私が住んでいる指宿は、観光はもちろんのこと、農業にも力をいれている。山川町・開聞町と平成十八年一月一日に合併をしたばかりだ。新生「指宿市」として、定番のサツマイモやオクラ、ビワなどの農作物のみならず、最近では温暖な気候を活かしたマンゴーやフルーツトマトなども栽培している。農家のお母さんたちが定期的にホテルなどで開く「べっぴん市」は、観光客に大人気だ。また、一年中、草木が花

写真－1　ソラマメ畑

写真ー2　地熱を利用した「巣目」

をつけるので、色とりどりの花を見ることができる。夏はキバナコスモス、冬は菜の花が街中に咲き乱れ、夏冬ともに黄色の花が市内を彩っている。そして、郊外の畑では、四季折々の作物が実をつける。特に春先、出荷前のソラマメの畑では、天に向かって実を付けている。生命力を感じることのできる光景だ。

また、豊富な泉源は、砂むし温泉という他ではなかなか体感できないリラクゼーションを作り出した。温泉が湧き出る地域では、家庭でも年中無休で温泉に入ることができる。また、熱を利用した「巣目（すめ）」という自然の調理器具を今でも利用している家庭もある。巣目とは、水蒸気が湧き出るところを意味する。そこで、地元の人間は野菜や芋などを長年の勘で蒸かす。ゆで卵は、大体十分程度と教わった。電気、ガスがいらない省エネ器具だ。九州一のカルデラ湖でも知られた池田湖は、知名度が高い。それに加えて、その裏にある、巣目のある鰻池（うなぎいけ）の地域もご案内すると、皆さん喜ばれる。ちょっとした観光スポットだ。指宿は地熱と密着した生活を送っているといえるだろう。

二、北海道を知る

住民も観光客も賑わう千歳市で、一番驚いたことは、お土産品の多さだ。新千歳空港では、北海道の商品が全て集まり、様々な商品が消費者の心をつかんでいる。特に北海道名産の乳製品や海産物は、各地の売れ筋や新鮮な直送物が並んでいる。水槽が並んでいる空港を初めて見た時は、売り手の意気込みを感じた。お菓子類に関しては、全国に名を知らしめた商品が所狭しと並んでいて、どの店も人足が途絶えることがない。毎日売り切れになるほどの商品を見ると、ついつい私も手を伸ばしてしまう。お土産にもセンスが問われる時代だ。先日のテレビで、物産展の不動の一位は北海道だと報道していた。北海道ブランドの強さと北海道への観光客の興味度が現されている。定番のお土産はもちろんだが、新商品開発を絶やさない姿からは、いつも新鮮な北海道を知って欲しいという心が目に見える。

道外者の入り込みが年間四百四十三万人という北海道では、豊富な資源でいつでもお客様に満足を与える。観光都市としては何ともうらやましい。

北海道では市街地を抜けると、あちこちで羊や馬の放牧が行われ、どこまでも続く畑では、鹿児島では見ることのできないラベンダーやジャガイモの白い花が咲いている。

鹿児島は、世界遺産である屋久島や荒波が島を

写真ー3　砂むし温泉

削る種子島、指宿と並ぶ温泉地の霧島など多くの自然が人々を魅了する。最近、それを活かした体験型の観光も盛んになってきている。

そうした地元の良さは理解しながら、北海道との違いに少なからず戸惑う。五月後半、野原や公園にはたくさんのタンポポが花を咲かせる。冬の間、雪の下で春を待ちわびているその花は、過酷な季節を全く感じさせないほど、そっと黄色い花をつける。夏が短い分、春と秋を長く感じることができそうだ。

冬には、毎日の積雪にも対応できるよう、標識や建物などさまざまなところに鹿児島にはない工夫が見られる。

先日、北海道旧本庁舎へ足を運んだ。重々しい知事室は圧巻だった。未開の大地を、どのようにして開拓したのか。

明治時代、鹿児島出身の黒田清隆も北海道の開拓に携わっていたと学んだ。近代化した今でこそ、北海道を見聞きし、その歴史と文化を感じることができる。全く違う歴史を歩んでいるようだが、同郷の偉人が残した足跡が、千歳市の近代化に少なからず影響を及ぼしたと思うと誇らしげな気持ちになる。

三、人との出会い

千歳市の窓口の任務に就いて、毎日数多くのお客様と接する。直接市民の声を聴くことができるので、毎日が新鮮であり、気づかされることが多い。まさか、対応している職員が指宿市から来ているとは知るはずもない。周りの職員やお客様に支えられての毎日だ。ここでは、職員はもちろん、お客様もほとんど標準語を話す。道外からの居住者が多く、出入りが激しい分、標準語が自然にでてくるのだろうか。たまに、相手から北海道弁がでると、ほっとするくらいだ。

千歳市は、さまざまな場所からの出身者が集まり、それぞれを認め合って生活している。

指宿市では指宿・山川・開聞それぞれ隣接しているにもかかわらず、話す方言が違う。地元に根付いた人々が今でも方言を若い人に伝えている。未だに一部の方の方言は聞きとれない時があるほどだ。こちらも方言で話すので、お客様と打ちとけやすい。地元を愛し、おもてなしの心を大切にする。言葉に限らず、昔から古き良きものを受け継いでいる。

千歳では丁寧な口調、言葉を使って接客するので、いつでも相手をお客様として対応している雰囲気が伝わる。どんな場所、時であろうと一対一で接すること基本は何もかわらない。その場に応じた話し方をできるように、千歳の方の振る舞いを見習いたい。

この一年間は千歳市民として皆さんと共に生活をする。毎日の生活で千歳の人と話す機会も増えてきた。人との出会いで北海道人の強さ、優しさに気づかされることも多い。また、氷濤祭りやスカイ・ビア＆ＹＯＳＡＫＯＩ祭など千歳特有のイベントも楽しみの一つだ。

思えば、指宿のイベントは企業から協賛を受けながら、ベテランのボランティアによって支えられての開催だ。菜の花マラソン・マーチやトライアスロン、フラフェスタなど、定着したイベントが行われる。

千歳市では市民主体のイベントに加えて、企業・自衛隊が行うイベントもあるため、指宿にはない手法と内容を経験したい。そして、冬の過酷な生活や自分が今まで味わったことのない経験を通して、千歳市を深く知り、指宿の生活とのギャップに驚きながら、日々の変化を吸収していきたい。